

ジェフリ・チョーサー作

トゥロローイラスとクリセイデ（翻訳）（その十）

宮 田 武 志 訳

ああ、ダイオメッド様、生れた町が好きですわ、わたくし。ジョーヴ様がお恵みで以って、あらゆる禍からすぐにもあの町をお救い下さいますように！ ああ、神様がその御力^みで、あの町を榮えさせて下さいますように！ もし出来れば、トゥロイに対して鬱憤を晴らしたいものだ、ギリシヤ軍がそう考えているんだってことは、わたくしよく存じてますわ。ですけど、あなたの仰有るようなことにはならないと思いますわ、絶対に。それにまた、父が賢明で機敏な人だってことも、わたくし存じてますわ。そして、今あなたが仰有いましたように、父は高価な犠牲を払って、わたしを購ってくれたのですもの、それだけ父の恩義を受けてるわけですわ、わたくし。ギリシヤの方々がすぐれた資性をお持ちになってるってことも、よく存じていますけれど、トゥロイの町にだって、印度から^⑩オークニーの島までの間に住んでいる人たちに劣らないくらい立派で、賢明^{九七〇}で、申し分がなくて、親切な人たちがいますわ、たしかに。

あなたが愛人の感謝をお受けになるために、その愛人に立派に仕えることがお出来になるだろうってことも、わたくし固く信じますわ。ですけど、恋愛ってことになれば、わたくしには結婚した夫がございましたのよ。そしてその夫の亡くなるまで、わたくし、心のすべてを捧げ尽くしましたわ。きっぱり申し上げますけれど、ほかの愛人のことなど念頭にございませんし、今までだって、一度も考えたことございませんわ。あなたが高いご門閥の方で居らっしゃるってことは、たしかにとくと承りましたわ。そのあなたが、このように女性を軽蔑しようとなさるのが、不思議でなりませんのよ、わたくし。それに、恋愛なんてこと、わたくしには確かに縁もゆかりもないことですわ、そんなことよりわたくし、死ぬまで歎き悲しみたいてって気持ですのよ、ほんとうに。今後わたくしがどんなことをするだろうかってことは、自分にも分りませんけ

ジェフリ・チョーサー作 トゥロローイラスとクリセイデ（翻訳）（その十）

れど、今のところ、楽しみたいって気持にはなれませんか、全く。現在のところ、わたくしは涙に明け暮れ、あなたは毎日戦争においそがしいってわけですね。^{九九〇}今後トゥロイの町が陥落した暁に、^{一〇〇〇}これまでに見たこともないようなことに直面した時、今までにしたことがないことをするってことになるかも知れませんが、わたくし。こう申し上げればきっと充分ご満足がゆくことだろうと存じますわ。

恋愛のことにお触れにならないのなら、わたくし喜んで明日もあなたとお話し致しますわ、ですからお気に召した時に、またここにお越し下さいましな。今お帰りになる前に、これだけのことを申し上げておきますわ、それは、^{一〇〇〇}万一わたくしがどなたかギリシヤの方にご同情申し上げますってことがあるとすれば、それはきっとあなただろうってことですわ、きれいな髪のパラスの女神にかけてお誓い致しますわ。こう申し上げたからって、あなたをお愛ししたいだの、お愛ししたくないだのってわけじゃありませんのよ。だけど要するに、あなたに好意はお持ちしますわ、ほんとうに。

彼女はこう言って目を伏せ、溜息をつきながら言いました、

「ああ、トゥロイの町よ、静寂と平穩のうちに、再びお前が見られますように、そうでなければ、わたくしの胸を裂いて下さいませ、そう神様にお祈りすることにしましょう。」

ともあれ、簡単に申しますと、^{一〇一〇}実際のところ、ダイオメッドは新たに執拗に迫って、しきりに彼女の同情を求めたのでした。そしてその後、実際、彼はクリセイデの手袋を手に入れることができて満悦したのでした。やがて日も暮れ、万事都合よく運ぶや、彼は立ち上って別れを告げました。

輝かしい宵の明星ヴィナスが現われて、^{一〇二〇}大きな太陽フィバスの沈んで行った道を絶えず示し、^{一〇三〇}月の女神シンシアは、出来れば獅子宮から出るものと、その車の馬を駆り立て、^{一〇四〇}黄道帯に燈火のような星砂子を燦然と現わしはじめましたが、丁度その時、クリセイデは父の美しく輝く天幕の中の自分のベッド中にはいり、この性急なダイオメッドの言葉、彼の立派な身分、トゥロイの危機、そしてまた、自分が孤独で友の助けを必要としていることなどを、絶えず心の中であれこれと考えつつづけていたのです。かくて、実際、ギリシヤに留まることを彼女が固く決意する理由が生じはじめたのでした。

^{一〇三〇}あくる朝になって、実際、ダイオメッドはまたクリセイデの所にやって来ました。わたしの話を聞くのを皆さんが止めておしまいになって

は困りますので、簡単に申し上げましょう。彼は自分の為に口巧者に弁じ立てて、クリセイデのはげしい溜息をすっかり鎮めてしまい、やがて、実際、彼女の苦悩の大部分を拭い去ってしまったのでした。物語^{一〇三}がわれわれに伝えるところによりますと、クリセイデはそののち、ダイオメッドが嘗てトゥロイラスから奪って自分に呉れた美しい栗毛の馬をダイオメッドに返し、また、^{一〇四〇}そんなことをする必要はなかったのですが、以前トゥロイラスの持物だった襟止めを彼に与え、更に、彼の憂鬱を一層よく鎮めんものと、自分の袖を小旗としてダイオメッドにつけさせたとのことです。この物語の他の個所には、更にこう書いてあります、それは、ダイオメッドがトゥロイラスに体を傷つけられた時、クリセイデはその大きな傷から血が流れ出るのを見てさめざめ涙を流し、看護に心を配ったという事実です。そしてまた、真偽の程は分りませんが、彼ののはげしい悲しみを癒やすために、^{一〇五〇}彼女は彼に心を許したと伝えられています。ともあれ、実際、物語の教えるところによりますと、かくてトゥロイラスを裏切るや、これほどまで悲しんだ女性はいなかったくらい、クリセイデは歎き悲しんだとのことです。彼女が言いますには、

「ああ、誠実に愛を貫くっていうわたしの誓は今すっかり消え去ってしまったのだわ、永久に！ だって、この上もなく優しく、この上もなく立派な方を裏切ってしまったのだもの。ああ、筆でも歌でも、この世の果てまで、わたしのことはよく言われまいだろう、^{一〇六〇}だって、色々な本でわたしを非難するだろうから。ああ、わたしは沢山人たちの口の端に上って、散々ひどく言われるだろう！ 世界中でわたしを責める鐘が打ち鳴らされるだろう！ 女性たちは誰よりもわたしを憎むだろう。ああ、そんな目に遭うなんて！ その女性たちは、わたしがその人たちの名誉を出来るかぎり汚したって言うだろう、ああ、悲しいことだわ！ よしわたしが過ちを犯した最初の女性ではないにしても、そのことがどうしてわたしに対する非難を斥ける助けになるだろう？ だけど、外にもっといい方法もないんだし、^{一〇七〇}今更後悔してみたってはじまらないんだから、とにかくダイオメッド様に誠実を尽くすことだわ。けれどもトゥロイラス様、このようにお互に離ればなれになっていて、外にどうすることも出来ないのですもの、あなたに良き日を授け下さいますようにって、そう神様にお祈り致しますわ、本当に今までお会いした誰よりもお優しくって、誠実にお仕え下さる方として、また、何時も愛人の名誉を誰よりもお守りになれる方として。」

こう言い終るや、彼女は忽ちわっと泣き出しましたが、更に言葉をつづけて言いますには、

「本当にわたくし、決してあなたをお憎みしないで、友情と賞讃の言葉を捧げる積りですわ、わたくしが何時までも生きるとしても、あなた

のご不幸なご様子を見るのは本当に悲しいことですし、間違ったことをなさったわけでもないのに、あなたをお見捨てするのだってことはよく分っていますけれど、何もかもやがて過ぎ去ってしまうのですわ。じゃあ、これでお別れることに致しますわ。」

ともあれ、実際、このダイオメッドなる人物が現われたために、どのくらいの時日がたってからクリセイデはトゥロリーラスを見捨てたのでしよう、そのことについてはどの作者も述べていないように思います。各人が今それぞれ自分の書物を注意して読んでみても、その時日はきっと分らないことでしょう。ダイオメッドが早速彼女に求愛し始めたとしても、そう簡単には彼女を口説き落せなかったでしょう。わたしはこの哀れな女性を、物語の中で彼女が責められることになっていく以上に、責めようとは思いません。気の毒なことには、彼女の醜名はあまねく弘まっていますから、その罪に対してはそれで充分だと言わねばなりません。そして、彼女は自分の不誠実をひどく後悔したのですから、何とか弁解してやるのが出来るならば、わたしは彼女に同情して弁解してやりたいと思います。

前にも申しましたとおり、トゥロリーラスは最大の努力を尽くして日を送ったのでした。けれども彼の心は幾度となく熱く燃え、冷たく凍り、その翌朝帰って来るとクリセイデが約束していた九日目の夜には、特にそのような状態でありました。たしかにその夜は殆んど全く休息も取らず、眠る気にも全然なれなかったのです。月桂冠を戴いた日輪フィーバスが、彼の道を徐々に昇り行きつつ、東方の海の八重波をその熱で暖めはじめ、^{四二一〇}ナイサスの娘なる雲雀が爽やかな心で歌う頃、トゥロリーラスはパンダラスを呼びにやりました。そして二人は、クリセイデの片影でも認めることは出来ないものと、町の城壁の上を逍遙し、近づいて来る人を余さず見届けんものと、正午頃までそこに立ち尽くして、遠くからやって来るどんな人でも、はっきりその見分けがつくまでは、それがクリセイデだと囁き合うのでした。トゥロリーラスの心は或は全く沈み、或は軽く弾みました。^{四二二〇}トゥロリーラスとパンダラスの二人はこのように拒がれたような気持で、虚しいものを見んものと、立ち尽くしていましたが、やがてトゥロリーラスはパンダラスに向って言いました、

「昼までにクリセイデさんはこの町に帰って来ないよ、きっと。父の所から抜け出すためには、することがどっさりあるんだ、たしかにそうだと思うね、ぼくは。年を取った父は、出る前に食事をさせてやりたいって思うだろうしね。苦しむがいいさ、あの爺さん！」

パンダラスが答えて言いますには、

「そうですよ、きっと。だから、ぼくたちも食事にしようじゃありませんか、^{四二三〇}昼からまたここに戻って来ればいいんですから。」

それ以上とやかく言わずに、二人は一旦家に引き返し、その上でまた戻って来ました。けれども、渴望している人を見つけるまでには、二人は長い間探し求めることでしょう、運命の女神は二人を愚弄しようと考えているのですから。

トゥローイラスが言いますには、

「きつとあの人は、年取った父の所にぐずぐずしていて、ここに帰って来る頃には、殆んど日が暮れてるだろうと思うね。さあ、ぼくは城門の方に行ってみよう。門衛は何時もぼんやりしてるんだから、あの人が晩く帰って来ても、門が明いてるって風にさせておくよ、素知らぬ顔でね。」

昼はどんどん過ぎて行き、やがて夕方になりましたが、クリセイデはまだトゥローイラスのもとに帰って来ません。彼は生垣や樹木や茂みの側で前方を眺めやったり、城壁越しにぐつと頭を突き出したりしていましたが、とうとう振り向いて言いました、

「ねえ、パンダラス君、あの人の考えが今分ったよ、たしかに。実際、すんでのことでまた新しくひと歎きしなければならなかったところなんだがね。あの人にはたしかに分別があるんだ、こつそり帰る積りなんだよ、きつと。あの人の利巧さには感心するよ、全く。帰って来るところを町の人たちに間拔顔でまじまじ見られたかあないんだ、あの人は。夜が更けてからこつそり町に帰って来ようと思ってるんだよ。だからパンダラス君、待ち遠しいなんて思わないことだ、待つより仕方がないんだからね、実際。ねえ、パンダラス君、ぼくの言うことを信じてくれるだろうね？ たしかに見えるよ、あの人の姿が！ そら、向うにさ。君、眼を上げ給え、見えないのかい？」

^{二六〇}パンダラスは答えました、

「いや、とんでもない！ 間違いですよ、全く。何のことですか、今仰有ったのは？ 一体あなたは今どこにいらっしゃるお積りなんですか？ 向うに見えるのは、なんのことはない、食糧運搬車ですよ。」

トゥローイラスが言いますには、

「ああ、君の言うとおりだ。だけど、たしかに、いま嬉しくて胸がわくわくするのは、全然訳がないってことはないと思うね。何かいいことが近づいてるんだって気がするせいなんだ、それは。なぜだか分らないんだが、こんなに嬉しくて仕方がないのは生れて初めてだよ、恐らく。あの人は今夜帰って来るよ、命を賭けてもいいさ。」

ジェフリ・チョーサー作 トゥローイラスとクリセイデ（翻訳）（その十）

パンダラスは、「ええ、そうかも知れませんが、全く」と答えて、トウロイラスの言うことに全面的に同意したものの、心の中では別のことを考えて、ひそかに笑うと同時に、全く悲しそうに独り言を言いました、「陽気な駒鳥が遊んでいた榛の森から来るでしょうよ、あなたが今ここで待っていられるものは。去年の雪よ、さようなら！」

門衛は城門の外に居る人たちに声をかけて、家畜は全部中に追い込んでもらいたい、さもなければ、一晚中城門外に居てもらわなければならぬのだ、と伝えました。そこで、夜も更けてから、トウロイラスはさめざめ涙を流しながら帰路についたのでした、待っても無駄だということがはっきり分ったからです。しかもなお、日を数え違えたのだろうと考えて、自らを慰めながら言いました、

「ぼくはすっかり間違えて取ったのだ、最後に会った夜、あの人はこういう風に言ったのだ、ねえ、愛するあなた、月が白羊宮を出て獅子宮を通り過ぎるまでに、出来れば帰って参りますわ、こう言ったんだ。だから、まだあの人が約束を守ってくれる可能性はあるんだ。」

あくる朝、彼は城門のところに行つて、城壁の上を西に向い東に向い、あちらこちらへと何度もぐるぐる廻り歩きました。けれども全く無駄で、絶えず期待が外れるのでした。そこで、夜に入るや、悲しみとはげしい溜息のうちに、彼は断念して家に帰りました。希望は彼の心から全く消え失せてしまったのでした。もはや頼るべき何ものもなく、彼の苦悩たるや全く強烈そのもので、苦痛のあまり、胸も張り裂けるような気がしました、と言いますのは、彼女がそんなに長く向うにぐずぐずしていることが分るや、それは彼女が約束を破ったことになることとて、そのことをどう判断していいのか、彼には全く見当がつかなかったからです。前にお話した十日という期間が終つてのち三日目、四日目、五日目、六

日目には、さきの約束を幾分信じて、彼の心はまだ期待と心配の間をさまよっていました。けれども彼女が期限を守らない積りなのだということとが判明するや、すぐにも死のうと覚悟を極めるより外には、取るべき方法を見出し得なかったのです。そこで、忌まわしいことながら、悲歎のあまり、物狂おしい嫉妬と呼ばれる邪悪な心が彼の胸の中に忍び込んで来たのでした。そのため、すぐにも死にたいような気がして、憂鬱のあまり飲食を断ち、あらゆる交友を避け、彼は終始このようにして日を過ごしたのでした。全く意気沮喪して、何処へ行っても、これが彼だとは誰にも殆んど分らないくらいでした。痩せ細り、顔色蒼白、力も抜けて、杖に縋って歩くという有様です。腹立たしいままに、彼はこのようなにして自らの身を衰えさせました。どこが痛むのかと尋ねる人があれば、胸全体に痛手を受けているのだ、と彼は答えるのでした。プライアム王も母も兄弟も姉妹も、なぜそのように悲しそうな顔をしているのか、何が原因でそんなに思い悩んでいるのかと、しばしば彼に尋ねるのです

が全く無駄です、彼はその理由を打ち明けようとはしないで、胸のあたりにはげしい苦痛を感じて、死にたいのだと答えるのでした。^{二二三〇}

かくてある日、ひと眠りしようと身を横たえたところ、たまたま彼は夢を見ました、自分にこのような苦悩を与えた彼女を恋い慕って泣きながら、足早に森の中を歩いているのです。夢の中でその森のあちらこちらをさまよい歩いているうちに、輝かしい日光に暖まって眠っている、大きな牙を持った猪が目につりましたが、傍にはその猪の腕にしっかりと抱かれながら、美しい愛人クリセイデが横たわっていて、しきりに接吻しているのです。その光景を目撃するや、彼は悲しくもあり恨めしくもあり、突然眠りから覚めて、大声でパンダラスに呼びかけながら言うのでした、

「ああ、パンダラス君、いま何もかも分ったよ。ぼくは死んだも同然なんだ、だって、外にどうにもならないんだもの。誰よりも信じていた美しい愛人のクリセイデさんがぼくを裏切ったのだ。たった今、あの人はよそで心を満たしたんだ。^{二二五〇} 聖なる神々が大きな御力によって、夢の中でそのことをぼくにはっきり見せて下さったのだ。夢の中で見たクリセイデさんはこうなんだ——」

ここまで言って、彼は一切をパンダラスにさらけ出しました、

「ああ、ぼくのクリセイデさん、ああ！ あなたはどんな狡猾さを、どんな新しい喜びを、どんな美しさを、どんな知識を——、ぼくに対してどんな正当な怒りを持っていると言うのですか？ ぼくがどんな罪を犯したからって、どんなひどい目に遭わせたからって、ああ、ぼくのことを考えてくれなくなったのですか？ ああ、信頼よ、ああ、誠実よ、ああ、深い確信、^{二二六〇} 誰がぼくから奪い去ったのだろう、ぼくの喜びのすべてであるクリセイデさんを？ ああ、なぜ、ぼくはあなたをここから去らせたのだろう？ そのために、ぼくは殆ど気も狂わんばかりになったのだ。誰が今以上誓いの言葉を信じるだろうか？ ああ、美しい人、クリセイデさん、たしかに、ぼくはあなたの言葉の一つ一つを福音だと思っていたのだ！ だけど、人が一番信頼したいと思う者こそ、もしその気になれば、誰よりも人を欺くのだ。ああ、パンダラス君、どうすればいいだろう？ 今度の場合、^{二二七〇} どうしようにも法がつかないので、いま、ぼくは新たにはげしい苦しみを感じるんだ、そして、こんなに絶えず悲しんでいるより、自分の手で命を断つ方がましだと思うんだ、だって、生きていれば毎日身を磨り減らすんだが、死ねば苦しみはなくなってしまふんだからね。」

パンダラスが答えて言いますには、

「ああ、なんて情けないことだろう！ 前にも言ったじゃありませんか、夢はありとあらゆる人を瞞すものなんだってことを。なぜでしょうか、それは？ 人が夢を間違えて取るからですよ。あなたの愛人の心が変わったなんて、どんな夢をご覧になったからって、そんなことを仰有るんですか？^{二二八〇}ご自分の杞憂ですよ、てっきり。よして下さいよ、そんなことをお考えになるのは。夢を読むことなどお出来になりませんよ、あなたは。猪の夢をご覧になったわけなんです、その意味は恐らくこうなんです、つまり、あれの年老いた白髪の父親が瀕死の状態に日に照らされて横たわっていて、あれが悲しさのあまり泣き叫びながら、地の上に横たわっている父親に接吻している、正にこういう風に解釈すべきですよ、あなたの夢は。」

^{二二九〇}「この夢の意味を知るには、どうすればいいだろうか、くだらないことかも知れないが。」

「感心なことを仰有る、じゃあ、ご忠告申し上げましょう、あなたは筆がお立ちになるんですから、大急ぎであれに手紙をお書きになることですね、そうすれば、今お疑いになってることの真相が充分ご納得ゆきますよ、その訳はこうなんです、きっぱり申し上げますが、もしあれの心が変わっているのなら、返事をよこすとは思われませんし、もし返事をよこせば、^{二三〇〇}あれが自由に帰れる状態にあるのかどうなのかってことが、直ぐお分りになるでしょうからね。また、万一、邪魔がはいって帰れないのなら、その訳を何とか言ってくる来ますよ。あなたはあれが向うに行ってから、まだあれに手紙を出していらっしやらないんだし、あれもまだ何も言ってくる来ますよ。断言してもいいんです、理由が、あれの頭にあるんですよ。ですから、今あれに手紙をお出しになれば、すぐ事の真相がすっかりお分りになる筈です。それ以外に打つ手はありませんよ。」

^{二三一〇}二人の意見は忽ちこういうことに纏まり、トウローイラスは大急ぎで腰を下して、自分の悲しみをクリセイデに最も適切に伝える書き方や如何にと、心の中で様々に想を練り、愛人クリセイデに次のように書き送ったのでした。

トウローイラスの手紙

心、からだ、命、喜び、思い、いな、何もかも捧げ尽くして、後生大事にひたすらお仕えし、既往においても然り、将来もまたあなたのものたらんと、ぼくの期している爽やかな花の君よ、^{二三三〇}悲しみに沈んだぼくは、言葉の語り得るかぎりの、心の考え及ぶかぎりのつつましきで以て、幾

度も幾度も繰り返しつつ、あなたのご寵愛を受けたいものだと思つたのです。愛するあなた、敢えて申し上げますが、ご存じのとおり、あなたがぼくのもとを去って、ぼくをばげしい苦悩のうちに置き去りにしてから、随分時がたちましたね。その苦悩は未だ以て癒やすに術なく、ぼくは日毎にますます苦しくなつて行きます、そして、何時までもこのような日を送らなければならぬことでしょう、ぼくは^{一三三〇}あなた、かくあれと望むかぎり。そこでぼくは、恐れつつも誠実な気持ちで、刻々増して行く悲しみをあなたに書き送つて、ありたけの勇氣と及ぶかぎりの筆の力で、苦しみを訴えたいと思ひます。悲しみのあまり筆を取らざるを得ないので。手紙によつた個所ありとせば、ぼくの眼から流れ出る涙を責めて下さい、その涙は、もし口が利けるなら、言葉に出して悲しみを訴えることでしょう。

最初にあなたにお願いしたのは、こんな手紙を読めば澄んだ眼が汚れてしまふなどとお思ひにならないこと、そしてまた、愛するあなた、この手紙を最後まで読んで下さることなのです。はげしい心痛のために智慧が鈍つて、万一ぼくが何かまずいことを口走つていても、愛するあなた、お許しいただきたい。恋をする男性がその愛人に対して、切々と悲しみを訴えるとするならば、また、そうするのが当然だとするならば、ぼくこそその男性でなくてはならないと信じます。だつて考えてみれば、^{一三五〇}實際あなたは、十日間だけ滞在すると言っておきながら、この二ヶ月というもの、ギリシャ軍の中にぐずぐずしていて、二ヶ月たつても一向帰つて来ないじゃありませんか。けれども、あなたのお望みどおりのことにぼくも満足しなければならぬのですから、ぼくはこれ以上不平を言おうとは思ひません、ただ、あなたがそちらに居て、

どのように暮らしてられるのか、もし気が向けば、そのことを詳しく知らせたい、来る日も来る日もこのように望むあまり、悲しい溜息をつきながら、謙虚な気持ちで、止むひまもないはげしい悲しみを書き送るのです。あなたの幸福と健康が絶えずその度を増して行つて、決して果てることがないという工合に、そのようにすばらしく、神があなたの幸福と健康を増して下さるように。美しいあなた、まさにあなたのお考えどおりに事が運ぶようにと、また、ぼくがあなたに対して全く誠実であるのと同じくらい確実に、あなたが直ぐさまぼくを憐んで下さることを許し給えと、そう神に祈ることにしましょう。

如何なる才智を以てしても言い表わせない悲しみ、そのような悲しみに沈むぼくの様子を知りたいと仰有るのなら、ぼくは次のように申し上げます、^{一三七〇}げられるのみです、あらゆる苦悩の器とも言うべきぼくは、この手紙を書いている時に生きてはいましたが、悲しい魂を何時でも肉体から離脱させ得る状態だったので、けれども、あなたの手紙の趣旨を知るまでは、それを実行しないで、まだ魂を抱いているのです。見れども見えざ

るぼくの二つの眼は、塩辛い悲しみの涙の泉になりました。ぼくの歌はわが身の不幸を歎く言葉に変わり、幸福は禍に、安楽は地獄に、喜びは悲しみに変わってしまいました。これ以上お話しする気力もないのですが、ただ、あらゆる歓喜、あらゆる愉悦はその反対のものに変わってしまった、そのために、ぼくは生を呪っているのだ、ということを上申しておきましょう。トウロイに再び帰って下さりさえすれば、あなたはすべてに対する償いが出来て、ぼくの胸の中の喜びを、以前の千倍以上も増して下さることが出来るのです、だって、あなたの顔を見れば、忽ちぼくは今まで誰も経験しなかったほど、人生を楽しむことができるでしょうから。

隣んでやろうというようなお気持は全然起らないにしても、約束を守ることだけは忘れないで下さい。ぼくの罪が死に値するとして、また、あなたには、もう、ぼくに会いたいというお気持は全然ないにしても、これまでぼくがあなたの為に尽くしたことに對する報酬として、愛する美しいあなた、死が一切の苦悶を終らせるよう、今すぐぼくに手紙をよこしていただけますか、後生です、正にぼくの導きの星たるあなた。もし外に理由があつて、そちらに留まっているのなら、手紙をよこして、ぼくを慰めて下さい。あなたが居ないということは、ぼくにとって地獄の苦しみに等しいにしても、じつと我慢して悲しみに堪え、希望を与えてくれるあなたの手紙で、心を楽しませることにしましょう。愛するあなた、手紙をよこして、ぼくをこのように歎かせないで下さい、希望が死で以て、ぼくを苦痛から解放して下さい。ぼくのまことの愛人たるあなた、今度あなたがぼくをご覧になる時には、ぼくは健康も生々した顔色も失ってしまっていて、あなたは、ぼくがお分りにならないことでしょう、きっとそうだと思います。ぼくの心の昼であるあなた、美しい愛人たるあなた、あなたの美しさに接することを絶えず渴望するのあまり、ぼくは命を保てそうにもありません。

これ以上何も言わないことにしましょう、あなたに言うべきことは、とても言い尽くせないくらい沢山あるのですが、^{一四一〇}ともあれ、あなたが、ぼくを生かせて下さるにしろ、死なせて下さるにしろ、あなたに良き日を授け給えと、ぼくは神に祈るのです。では、さようなら、生死何れなりと、ぼくに命じることの出来る美しい爽かな女性！ あなたから健康を与えられなければ絶対に健康になれないぼくは、あなたの誠実を絶えず求めているのです。ぼくの墓がぼくのからだを包む日は何時なのか、それはあなたのお心次第であり、あなたの自由に任せられているのです。ぼくの生命はあなたに委ねられているのです。一切のはげしい悩みの苦しさからぼくを救うべき力は、あなたに在るのです。では、ご機嫌よう、愛するあなた！^{一四二〇}

あなたの丁より

この手紙はクリセイデのもとに送られましたが、それに対する彼女の返答を要約すれば次のとおりです、つまり、必ず出来るだけ早く帰って、前非をすっかり改めたいと、いとも切なげに書き認め、最後に、帰る積りだが何時のことになるか、自分にも分らないと書き添えたのでした。その手紙の中で、彼女は大いに追従これ努め、誰よりもトゥローイラスが一番好きだと誓ったのですが、トゥローイラスはその言葉を空疎な誓言に過ぎないと考えました。

だけどトゥローイラスよ、気が向くならいま君は、東に向い西に向い、鳶の葉の笛を吹き鳴らすがいい！ 世の中はこうしたものなのだ。神よ、われわれを禍から守り給え、すべての誠意ある者を榮えしめ給え！

クリセイデが何時までも帰らないために、トゥローイラスの苦悩は日夜募って行き、希望は薄れ、力も衰えて、彼はどっと床についてしまいました。クリセイデが秋風を吹かせているのだと、絶えず想像しながら、^{一四四〇}飲食を絶ち、睡眠を取らず、口も利かないで、そのために彼は殆んど

正気も失わんばかりです。さきにお話した夢のことが、頭にこびりついて離れません。自分は恋人を無くしてしまったのだ、ジョーヴがその神慮によって、クリセイデの不誠実と自分の不幸の意味を、眠りの中で啓示し給うたのだ、猪こそその具体的な姿なのだ、彼は絶えずこのように考えつづけるのでした。^{一四五〇}そこで彼は、カサンドウラという名で広く呼ばれている妹のシビルに来て貰い、息もつがずに夢の一件を残らず話した上で、頑丈な牙を持った強そうな猪の謎を解いてもらいたいと頼みましたが、暫くしてからカサンドウラは、その夢について次のとおり説明しました。まず微笑してのち、彼女が言いますには、

「お兄さま、この夢のほんとうの意味が知りたいって仰有るのなら、まず昔の物語を一つ二つお聞きにならなければなりませんわ、それは、^{一四六〇}運命の女神が昔の貴族たちを破滅させたってお話ですわ。その物語をお聞きになれば、書物の伝えるところによって、その猪のことがすぐお分りになりますわ、その猪がどんな血統なのかってこともね。

ギリシャ人が生贄^{にえ}を捧げもしなければ、祭壇に香を焚きもしなかったため、怒ったダイアナは、ギリシャ人がかくも自分を侮ったことに対して、大変残酷な方法で復讐致しました、と申しますのは、小屋に繋がれた牛ほどの大きさのある猪に、^{一四七〇}穀物も葡萄も残らず食べさせてしまったのです。この猪を殺さなければと、国中の人が躍起になりましたが、その騒ぎのさ中に、この広い世の中で一番賞讃の的になっていた少女が、その猪を見てやって来ました。^{一四八〇}その国の王様のメリエージャは、この清楚な気高い少女を大変愛していましたので、持前の剛毅さで以て、その

猪を一気に殺してしまい、その首を少女に送りましたが、古書の語るところでは、そのために争いが起り、大きな嫉妬を買うことになったのです。昔の書物の言うことが本当なら、この王様の後裔としてタイデュースが現われたのです。このメリエージャが母の手にかかって死んだ経緯^{いきざう}は、今お話ししないことに致しましょう。それを詳しくお話ししては、長くなりますから。」

シビルはまた、タイデュースが盟友ポリナイシーズ卿の為に、その兄弟のイテューオクリーズ卿が不法にも実権を握っていたテーベの主権を要求せんものと、堅固なテーベの町に赴いた次第を、息もつがずに順を追って長々と話しました。また、タイデュースが五十人の屈強な騎士を殺した時に、ヒーマニディーズが逃亡した次第をも述べ、更に、色々な予言をすべてそらんじて語り、七人の国王が軍勢を率いてテーベの町を包囲した次第、聖なる蛇のこと、河の話、猛り狂の女たちのことなど、彼女は残らず話しました。また、アーケモラスの埋葬とその追悼競技のこと、アンフィアレースが地中に吞まれたこと、アーゴスの主君たるタイデュースが殺された次第、ヒッポミンドが忽ちのうちに溺死したと、パーセノピアースが負傷して死んだこと、傲慢なカパニュースが雷に打たれ、悲鳴をあげて死んだこと、このようなことも彼女は語りました。更に、兄弟たるイテューオクリーズとポリナイシーズの二人が、小競り合いで互に殺し合った次第、ポリナイシーズの妻のアージアが歎き悲しんだこと、テーベの町が焼け落ちたこと、それらのことも語ったのでした。かくて彼女の話は、昔の物語から時代が降ってダイオメッドのことに及び、次のように言いました、

「この猪こそ、その猪を殺したメリエージャのご子孫である、タイデュースさんのご子息のダイオメッドさんのことなんですわ。お兄様の愛人の方がどこに居らっしゃるにしても、たしかにこのダイオメッドさんとその方が、お互に相手の心をしっかりと抱き合ってらっしゃるんですわ。お歎きになろうと、打っちゃってお置きになろうと、お兄様のお好きなようになさいましな、だって、たしかにダイオメッドさんの勝ちで、お兄様の負けよ。」

一五二〇
トゥロイラスは答えて言いました、

「嘘だよ、そんなこと、この女魔法使めが！ お前の予言などみんなであらめだ！ 大予言者だなんてうぬ惚れだよ、お前の。気まぐれな馬鹿が、女性を中傷するのに懸命なんだ。帰ってくれ！ 泣きべそを掻くがいい！ 恐らく明日になれば、化の皮が現われるさ！ 人の言うところに誤りがなければ、比類がないほど情愛が深くて、すぐれた女性だったアルセステイス^{アルセステイス}、あのアルセステイスを中傷するようなものだよ、お前

の言うことは。^{一五三〇}自分が死ななければ夫の命が危いって時に、アルセステイスは進んで夫の身代りになって、地獄に落ちて行こうとしたのだ、そして直ぐさま死んでしまったんだ、書物にこう伝えられてるんだよ。」

カサンドウラは立ち去りましたが、トゥローイラスは彼女の言葉を聞いて腹立たしくてたまらず、荒々しい気持になって悲しみをも忘れてしまい、医者の手で病気がなおったとでも言うように、突然ベッドからはね起きてしまったのでした。そして毎日懸命に事の真相を究明しようと思いました。^{一五四〇}かくて彼は不幸に堪えて行つたのでした。

支配権が一つの国民から他の国民へと移るというような、また、ある国民が屈辱を受けるといふような、変遷隆替、崇高なジョーヴの神慮神意によってその手に委ねられるままに、そのような変遷隆替を握っている運命の女神、その運命の女神が、トゥローイの町の輝かしい羽毛を日毎にむしり取って行つて、遂に町の人たちは全く喜びを失ってしまったのでした。このような状態の下にあって、ヘクターの生涯の終局が驚くほど急速に近づきつつありました。^{一五五〇}運命は彼の魂がその肉体から離脱することを欲して、魂を肉体から追い出すべき手段を講じつつあり、彼がそれに逆らおうとしても、運命は彼に手を借してくれなかったのです。ある日、彼は戦闘に出かけましたが、憐むべし、その戦闘で最後を遂げてしまいました。如何なる人にあれ、苟くも日頃武器を手にするほどの人は、かくばかり高潔な騎士の死を悼むことだろうと思われまふ。ヘクターがある国王の兜の面頬に手をかけて引きずっている時に、アキリーズが出し抜けに鏈帷子^{くさりかたびら}を通して彼のからだを突き刺し、かくてこのすぐれた騎士は一命を失つたのでした。

古書の伝えるところによれば、彼の死は実に言語に絶するほど悼まれたのですが、とりわけ、彼に次いで勇武の源とも言うべきトゥローイラスの悲しみは、絶大でありました。^{一五七〇}この悲しみのうちに日を過ぎつつ、悲哀、恋情、不安ともども至り、そのために彼は日に幾度となく、わが胸張り裂けよと叫びました。^{一五七〇}愛人の心が変わつたのではないかと絶えず心配して絶望に陥りながらも、彼の心はしきりに彼女の上に馳せて行きます。恋人の常として、客色麗しいクリセイデを取り戻したいものだと思ふ、彼女がぐずぐずしているのは全くカルカスのせいなのだと、心の中で彼女の為にしきりに弁護してやるのでした。彼女に逢うために巡礼に身を変えようと堅く決心したこともしばしばありましたが、目ざとい人たちに気づかれぬように変装することも出来ないだろうし、万一ギリシャ軍の中で見破られた場合には、^{一五八〇}満足の行くように申し開きも出来ないだろうと考え、かくて、さめざめ涙を流して泣くことも幾度となくありました。哀れにも、改めて何度もクリセイデに手紙を書き

ました、怠って書かないというようなことはなかったのです。そして、自分の誠実な気持は変らないのだから、約束を守って帰って来てもらいたいと乞うのでした。それに対してある日、クリセイデは多分気の毒だと思ったのでしようが、この問題について返事をよこし、次のように言ってきました。

クリセイデの手紙

^{一五九〇}キユーピッドのご子息様、美しさの典型、ああ、騎士の剣、優しさの源よ、苦しみ、恐れ、健康を失った者が、どうして今あなたに喜びを送りすることが出来ましょう？ ふさぎ込み、病み、歎き悲しむわたくし！ お互に相手をどうすることも出来ないわたくしたちでございませうら、わたくしはあなたに元氣も健康もお送り申し上げることは出来ません。

歎きのお言葉で満たされた数々のお手紙、悲しい気持で篤と拝見致しました。お手紙が涙ですっかりよごれているのが目につきます。そして、^{一六〇〇}わたくしの帰ることをお望み遊ばすこともよく分りました。でも、そのことはまだ出来そうもございません、その訳は、この手紙が人に見られては困りますので、今申し上げないことに致しましょう。不安焦燥のお気持、わたくしにとって本当に悲しいことでございます。あなた様のお定めになることが最上だとお考えになれないようでございますわね。また、あなたのお心は、楽しくなりたいというお気持だけで一杯で、ほかのことは全然お考えになれないご様子ですわね。でも、お怒り遊ばさないように、^{一六二〇}お願いでございます、人に悪く言われはしないかということ、ただそれだけの理由で、わたくしこちらに留まっているのでございますもの。それと申しますのも、わたしたち二人のこれまでの経緯^{いきまつ}について、予期以上の噂を耳にしたからでございます。そして、そのような噂は、素知らぬ顔で揉み消すことにしたいと存じます。お怒り遊ばしては困りますけれど、あなたのなさることは、ただ当てにもならない期待でわたくしをお引きずりになることだけなのだとということ、わたくしには、そのことも分りました。でも、それは今の場合大したことでもございません、ご誠意とご高潔以外のものが、あなたのお心にあるとは考えられないのですもの。

わたくし帰る積りではございます、でも、今は大変危険な立場に立っていますので、^{一六二〇}帰る日だの、年だのを、はつきり極めることは出来ません。ですけれど、とにかく、いつまでもご親切なお言葉とご友情がいただけますよう、切にお願い申し上げます、と申しますのは、わたくし本当に生涯あなたのお友達として、ご信頼いただける積りでございますもの。大変端折った手級になりましたけれど、悪しからず思召し下さいま

すよう、これまたお願い申し上げます。今の場所では、手紙も充分書けませんし、元来わたくし書くことが不得手なのでございますもの。それに、大切なことでも、時には簡単に書けるものだということもございます。手紙の心が何よりで、長さではございませんから。では、ご機嫌よろしく、神様があなたにお恵みをお垂れ下さいますように！

あなたのCより

この手紙を読んで、トゥロイラスは全くよそよそしい書き振りだと思い、悲しげに溜息をつきました。そして、これこそ心変りのはじまりなんだという気がしました。けれども、約束したことを彼女が守らないだろうということは、結局どうしても信じられないのでした、熱烈な恋をしている者にとっては、よしそのために苦しい思いをするにせよ、このような場合に恋を思い切るというようなことは、全く辛いことなのです。ともあれ、人は最後にはどうしても真実を知るそうですが、そのような事態が忽ちやって来て、情愛深かるべきクリセイデが冷淡であることを、トゥロイラスは充分思い知らされ、結局、自分のやって来たことがすべて破滅に直面したことを、疑う余地もなくはっきり知ったのでした。

ある日トゥロイラスは、死ぬのではないかと思われるほど恋い慕っているクリセイデの心を疑いながら、憂鬱な気持で立っていました。たまたまその時、これは当時の習慣でありましたが、デイフォバスの眼前で、トゥロイの町のあちこちらを、彼の戦勝の印として、一種の陣羽織が担ぎ回されました、物語にはそう記されています。ローリアスによりますと、この陣羽織は、その日デイフォバスがダイオメッドから奪い取ったものだということです。それが目に映ると、トゥロイラスは注意してその長さ、幅、意匠を余さず観察しましたが、眺めているうちに、突然彼は辣然としました、^{一六六〇}、といますのは、その陣羽織の内側の襟のところに、ブローチがついているのが目にとまったからです。このブローチこそ、クリセイデがどうしてもトゥロイの町を離れなければならなかった朝、トゥロイラスが自分のことを、また、自分の悲しみを思い出してもらう為に、彼女に与えたブローチであり、何時までもそれを手離さないことを彼女は固く誓ったのでした。ともあれ、もはや愛人の信ずべからざることを、今彼ははっきり思い知らされたのです。

トゥロイラスは家に帰り、すぐさまパンドラスを呼びにやって、この新しい出来事の一部始終やブローチのことなどを、逐一パンドラスに話し、^{一六七〇}クリセイデの心変りや自分の長い間の恋情、誠実、苦悩などを訴えました。やがて訴の言葉をやめ、平静を取り戻すために、死にたいものだとしきりに叫びながら言うのでした、

「ああ、愛するクリセイデさん、あなたの誠意はどこにあるのだ、あなたの誓いはどこにあるのだ、あなたの愛情はどこにあるのだ、あなたの誠実はどこにあるのだ！ あなたは今ダイオメッドに有頂天なんだ！ ああ、ぼくに対して誠実であろうとしないあなたであるにせよ、^{一六八〇}ぼくに対してこのように肩すかしはかけないだろう、少くともそう信じていたのに！ 誰がこれ以上誓いの言葉を信じるだろうか？ ああ、クリセイデさん、あなたがどんなに変わり得るかということを、ぼくは今まで想像しようとしなかったのだ。また、ぼくが罪を犯したとか、間違ったことをしたとか言うのなら別だが、さもない以上、このようにぼくの命を奪うほどあなたの心が無慈悲だとは、考えもしなかったのだ！ ああ、あなたの誠実の名は、今や全く失われてしまったのだ、ぼくはそのことが残念でたまらない。あなたが新しい愛人に与えたいと思うブローチはなかったのだろうか、ぼくのことを思い出してもらおう品として、^{一六九〇}涙ながらにあなたに贈ったあのブローチの外には？ それも、ああ、ぼくを軽蔑する気持以外には理由はなかったのだ、また、自分の真意をはっきり示そうと考えてのことだったのだ。そのことから察せられるんだ、あなたが、ぼくのことなど綺麗さっぱり忘れてしまったのだったことが。一日のうちの四分の一の間さえ、心の中であなたを愛さないでいることが、どうしても出来ないんだ、ぼくには！ ああ、嫌だ、嫌だ、なさけないことだ、^{一七〇〇}ぼくにこんな苦杯を嘗めさせるあなたが、今でもまだ、誰にもまして好きでたまらないなんて！ 神よ、ダイオメッドに出くわす機会を授け給え！ 実際、ぼくに力と機会があるなら、あの男の脇腹から血を噴き出させてやるんだ。ああ、誠実を助け不正を罰することに御心^{みこころ}を用い給うべき神よ、なぜこの悪徳に神罰をお与えにならないのですか？

ああ、パンダラス君、君は^{一七一〇}ぼくが夢を信じることを責め、いつも、ぼくを叱ってばかりいるんだが、お好みとあれば、今こそ君自身の眼で見ることに出来るんだ、君の姪の美しいクリセイデさんが、今や如何にご誠実でいらっしゃるかってことがね。たしかに神は、眠りの中で喜びと悲しみを様々な形でお示しになるんだが、このことは今度、ぼくの夢で証明されたんだ。そうだ、かくなる上はとやかく言わずに、^{一七二〇}今後は討死することに全力を尽くすことだ、その日がどんなに早く来ようが、一向構わないさ！ ともあれ、クリセイデさん、ぼくがこれまでずっと全力を傾けて仕えて来た美しい女性よ、全くのところ、ぼくはあなたからこんな仕打ちを受けなくてもいい筈なんだ。」

トゥロロイラスの言葉を残らず聞いて、その言うことが至極尤もだと思ったパンダラスは、ひと言も答えようとはしません、友人の悲しみが気の毒でもあり、姪のよからぬ所業が恥ずかしくもあり、この二つの原因で茫然として、石のように沈黙したまま、ひと言すら発することが出

来なかったのです。けれど^{一七三〇}も漸く彼はこう言いました、

「兄弟とも言うべきトゥローイラスさん、あなたの為にぼくは、もうこれ以上何も出来ません、言うべき言葉も知りません。実際、ぼくはクリセイデを憎みます。誓って、永久に憎みます！ だけど、ぼくは前にあなたが頼みになったことは、全部やったのです、自分の名誉も平穩も顧みないで、もし何かあなたのお気に召すことをすることが出来たとすれば、ぼくも満足です。今度の裏切行為は本当に悲しいことです。ぼくにとっても。方法さえ分れば、全くのところ、あなたのお心を和げるために、喜んで償いをしたいと思います。全能の神がこの世界からずぐさま、クリセイデを除き給わんことを！ これ以上ぼくは何も言えません。」

トゥローイラスの悲しみと歎きは実に大きかったのですが、運命の女神は自らの道を絶えず進んで行きました。そして、クリセイデはタイデュースの息子を愛し、トゥローイラスは悲痛な思いのうちに、泣かなければならなかったのです。何びとが能く観ずるにしろ、浮世とはこういうものなのです。身分の如何を問わず、心の平和は得難いものです。神よ、願わくは、われわれをして最もよき人生行路を歩ましめ給え！^{一七五〇}

昔の書物にも見えるように、幾多の凄惨な戦闘で、この気高い騎士トゥローイラスの騎士らしさと偉大な力量が見られたのは、疑なきところです。また、ギリシャ軍がトゥローイラスの憤激のために、日夜を分たず、無慙な犠牲を払わされたことも、確かなことです。トゥローイラスは絶えず誰よりもまずダイオメドを探し求めたのです。そして、二人はしばしば相会して、大言壮語しつつ、凄惨な渡り合いを演じ、かくて^{一七六〇}双方それぞれ、磨き澄まされた槍の鋭さをためしたようです。そしてまた、トゥローイラスはたしかに、幾度も物凄く猛り狂いながら、相手の兜に打ちかかりました。しかし運命の女神は、何れかが相手の手にかかって命を落すことを望まなかったのです。

もしもわたしが、もともと、この勇敢な人物の武勇のほどを書きしるす積りであったのなら、彼の奮戦振りについて今お話しするでありましょう。けれども、わたしは彼の恋愛について書きはじめたのですから、出来るだけその方面のことをお話して来た次第です。彼の勇戦振りがお聞きになりたい方は、ダレスをお読み下さい、その奮闘振りの全貌がお分りになることでしょう。眉目麗しい^{一七七〇}婦人各位、並びに身分の高いご婦人の皆さんにお願い致したいのですが、なるほどクリセイデは不誠実な振舞をしたのですけれども、彼女が不埒を働いたからとて、わたしに対してご立腹なさらないで下さい、彼女の罪過はほかの書物にも見えることなのです。思召しとあれば、ピネロピの貞節だの、貞淑なアルセステイスのことだのについて書くことに致しましょう、わたしはむしろその方が書きたいのです。そして、わたしがこのような物語をお話しし

ますのは、男性の為にということもありますが、それよりもまず、不誠実な男性たちに裏切られる女性の為なのです。とてつもない智慧と狡猾さで、あなたたち女性を欺く者たちに、神が悲しみをお与えになりますように、アーメン！ このような理由でわたしはこの物語を語ろうというのです。そして、実際、あなたたち女性の皆さんにお願い致しますが、男性にご注意下さい、また、わたしの語ることに耳をお傾け下さい！

消え失せよ、ささやかな書物、立ち去れ、ささやかなわが悲劇よ、

神がお前の作者に、その命あるうち、

喜劇を書く力を授け給わんことを！

さあれ、ささやかな書物よ、嫉みの心を起さず、

すべての詩に対して謙虚であれ、

そして、ヴァージル、オヴィット、ホーマー、ルーカン、ステーションヤスの歩み行くを見るところ、

その足跡に吻づけせよ。

わが国の言葉は音も綴りも多種多様なのだ、

それ故わたしは神に祈ろう、

何びとも、国話を知ること乏しくまに、

お前を写し誤らざれと、また、韻律を読み誤らざれと。

何処で読まれるにせよ、吟唱されるにせよ、

お前が理解されるようにと、神に祈るのだ。

ともあれ、もとの話の本筋を再び辿ろう。

さきにちよっとお話ししかけたように、ギリシャ軍はトウロイラスの憤激のために、高価な犠牲を払ったのでした、といひますのは、わたしの聞き及ぶかぎりでは、その時代ヘクターを除けば外に並ぶ者なしと言うべきトウロイラスのことですから、彼は何千人という敵兵の

命を奪ったのです。さあ、悲しむべし、神意とあれば是非なきことながら、勇猛なアキリーズが無慈悲にも、彼を斬り殺してしまいました。^{一八〇}このようにして命果つるや、軽やかな彼の魂は四大を反対側に残しつつ、^{一八二〇}いとも樂しげに第八天層の内側に昇って行きました。そして、そこに在って彼は、天上の妙音に満ちた調べに耳を傾けながら、諸遊星をつくづく打ち眺めたのでした。次に彼はそこから、海で取り囲まれたこの渺たる一点の土塊をじっと見詰め、このあわれな人の世を全く侮蔑しつつ、天上の至福に比べればすべては空しいものだと思います。最後に^{一八三〇}彼は自分の殺された場所を見下して、自分の死をいたく歎く人たちの悲しみを心の中で笑い、全心を九天に向けるべきに、永続し得ない盲目的な快樂をばげしく追い求める一切の人間の営みを罵りました。簡単に申しますと、かくて彼は、マーキュリーが彼の住居として定めてくれた場所へと去って行ったのです。

見よ、トゥロイラスは恋ゆえに、このような最後を遂げたのだ！

偉大な彼の勇武は、かくて悉く終ったのだ！

^{一八三〇}やんごとなき王統の身は、かくて終りを告げたのだ、

彼の喜び、彼の氣高さは、かくて終ったのだ！

偽りの世の無常は、かくて終ったのだ！

さきに語ったように、クリセイデへの彼の恋情はかく始まり、

彼の命はかく消え果てたのだ。

ああ、若い生々した男たち、女たちよ、

おん身たちの年頃には恋心が芽生えましょうが、

うつし世の空しさから故里に帰り、

自らの姿に似せておん身たちを造り給うた神に、

心の面を^{おもて}上げることだ、

ジェフリ・チャーサー作 トウロイラスとクリセイデ（翻訳）（その十）

一八四〇
そして、人の世は市に過ぎずと考えよ、

美しき花のごとく、忽ち消え失せる市に過ぎずと。

かの君を愛することだ、

まさに愛のために、われわれの魂を購わんと、まず十字架の上に死し、
のち蘇り、いま天上におわすなるかの君を。

まこと、かの君こそ、人を欺き給うまい、

おのが心を余さず君に委ねんとする人を。

かの君こそ、こよなく愛すべき人、こよなく柔和なる人、

されば、偽りの恋人を求める必要があろうか？

ここに見よ、異教徒の呪うべき古き習俗を、

一八五〇
ここに見よ、彼等の神々の効験如何に薄きかを。

ここに見よ、はじめな人の世のもろもろの欲望の終末を。

ここに見よ、労苦に対して如何なる結末と報酬が与えられたかを、

ジョーヴ、アポロ、マーズ、さらに、もろもろの神によって！

いにしえの作者の書物を求めんとならば、

ここに見よ、詩の形による彼等の言葉を。

この書物を捧げよう、おん身に、おお、道学者ガウアよ、⁽⁴¹⁾

おん身に、哲学者ストウロードよ、

されば寛仁の心もて、いとも熱心に、

必要とあらばわが書くところを訂し給え。

十字架の上に御命絶えし誠信なるキリストに、

一八六〇

全心を傾けて、絶えず慈悲を乞おう。

そして、主に向い、次のように祈ろう。

自らは限られずして、永久に三、二、一として治め給い、

すべてを限る御力を持ち給うなら、

永生の君、一、二、三よ、

見ゆる敵、見えざる敵より、われらを守り給え。

そして、イエスよ、われらの一人、一人を、

あなたの慈悲を受くるにふさわしき者たらしめ給え、

あなたの慈悲のために、処女なるあなたの優しき母君の愛のために、アーメン。

トゥロイラスとクリセイデの書おわる。

〔注 解〕

(16) スコットランドの北方の島。ローマを中心として、印度は世界の果て、オークニーは西の果てと考えられていた。

(17) 「これまで見たこともないこと」というのは、トゥロイの陥落のこと、また、「今までにしたこともないこと」というのは、二番目の夫と結婚すること。

ジェフリ・チャーサー作 トゥロイラスとクリセイデ(翻訳) (その十)

- (18) 巻の四の第一五九一行でクリセイデは、月が獅子宮を通り過ぎるまでに帰って来る旨をトゥロイラスに誓ったが、ここでは、今やその時期がまさに至らんとすることを示している。
- (19) Guido の *Historia Troiana* を指している。
- (20) メガラ (Megara) 王ナイサス (Nisus) の娘シラ (Scylla) のこと。クリート島の王マイノス (Minos) を愛したが、のちに捨てられて海に飛び込み、Ciris という鳥に姿を変えられたという。
- (21) 実現しそうにないことの表現。
- (22) 「去年の雪」とは、過ぎ去って取り戻すことができないものこと。
- (23) ジュース (Zeus) とクリメニー (Clymene) との間の娘であるアタランタ (Atalanta) のこと、足が速いので有名。
- (24) ギリシャ西部の古都たるカリドン (Calydon) のこと。
- (25) 以下の叙述は、ローマの詩人スターティウス (Statius) の「テーバイス」(Thebais) に拠ったもの。テーベ王イーディパス (Oedipus) の息子たるポリナイシズ、イティオクリーズの兄弟は、父の死後交互にテーベを治めることになっていたところ、後者が支配権を独占したので、前者はこれを回復せんものと、アーゴス (Argos) 王アドウラスタス (Adrastus) の助けを求め、ここにテーベ攻略戦が起った。ダイオメッドの父タイデュースは、ポリナイシズ、アドウラスタス、及び、この巻の第一五〇行以下にその名の出るアンフィアレアス (Amphiaraus) 、パーセノギアス (Parthenopaeus) 、カパニュース (Capaneus) と共に、ギリシャの詩人アイスキュロス (Aeschylus) の「テーベを攻める七将」(The Seven against Thebes) の一人であった。
- (26) タイデュースを待ち伏せて襲撃するために、イティオクリーズによって派遣せられた五十人の騎士の一人。
- (27) ヒーモニディーズ (Haemonides) 、アンフィアレアス (Amphiaraus) 、レーアス (Laius) などの予言者を指しているであろう。
- (28) テーベ攻撃の将士が渴を覚えたとき、レムノス (Lemnos) 王ソーアス (Thoas) の王女ヒプシピリ (Hypsipyle) は将士をランジア (Langia) 河に案内したが、その間に、ジョーヴから遣わされた蛇が彼女の子アーケモラス (Archemorus) を喰い殺した話。なお、ヒプシピリはチャーサーの「善女物語」(The Legend of Good Women) の第四話第一部を成している。
- (29) 前記ランジア河のこと。
- (30) レムノス島の女たちが、国王ソーアスを除く島内のすべての男性を殺したという話。
- (31) アンフィアレアスは敵の追撃を受けて遁れる途中、地震のために地中に吞まれた。
- (32) カパニュースはテーベの城壁によじ登っている最中に、雪に打たれて死んだ。
- (33) テッサリヤのフィリー (Phaeae) 王アドゥミータス (Admetus) の后。夫が運命の女神から死を宣せられたとき、夫の身代りになって黄泉に降ったが、ハーキュリーズによって救い出された。妻の道を全うする女性の典型とされている。女の不誠実を扱った「トゥロイラスとクリセイデ」に対する「取消しの詩」(palinode) の積もりで書かれたとも言われる「善女物語」の序詩で、チャーサーはアルセステイス (Alcestis) を雛菊に化身した貞淑な女性として扱っている。
- (34) 言うまでもないが、巻の二の第一三九八行に初めてその名の出たトゥロイラスの兄。

(35) 卷の一の注(3)参照。

(36) ダレスについては、巻の一の注(7)参照。チヨースーがこの物語において、ダレスの「トゥロイ滅亡史」(De Excidio Trojae Historia)を実際に利用したかどうかは疑わしい。

(37) スパルタ王アイカリアス (Icarus) の娘で、オディシユース (Odysseus) の妻。夫のトゥロイ出征中に、多くの男性に言い寄られたが、舅の衣服を織り終るまでは求婚に応じないと称し、昼間織った布を夜間にひそかに解いていた。そのうち二十年経って夫が帰って来て、求婚者を殺してしまった。操の正しい妻の典型。ピネロピの名は、チヨースーが「トゥロイラスとクリセイデ」の直後に書いたと考えられている「善女物語」の序詩のバラッドに見える。ついであるが、「善女物語」は、チヨースーがトゥロイラスを見捨てた不誠実なクリセイデ——恋愛教に対する異端者——の物語を書いて女の名譽を傷つけた罰として、恋愛教の聖徒たる「善女」たちの物語を語るという構想になっているのであるが、これは全くの虚構ではなく、事実チヨースーは、「トゥロイラスとクリセイデ」を書いたことにある程度心を痛め、いわゆる「取消しの詩」(palinode)を書いて自己の名譽を回復したいという心境にあったとも考えられるのであって(前記注(33)参照)、その推定の理由の一端は、「トゥロイラスとクリセイデ」のこの個所においても窺われるのである。

(38) Marcus Annaeus Lucanus, 39-65, A.D. ローマの詩人で、哲人セネカの甥。ラテン文学のなかでは、ウェルギリウス (Vergilius) のアエネイス (Aeneis) に次ぐ最大の叙事詩と「言われる」[「パルサリア」] (Pharsalia)——別名「内乱」(De Bello Civilis)——を作った。

(39) Publius Papinius Statius, C. 40-96, A.D. ローマの詩人、「テバイス」(Thebais)、『アキレイス (Achilleis)』などの作品がある。中世において彼が重んじられたことは、チヨースーが彼の名をヴァージル、オヴィッド、ホーマーなどと併列していることから察せられる。

(40) トゥロイラスの昇天に関するこの個所の記述は、ボッカッチョのテセイデ (Teseide) におけるアーサイト (Arcite) の昇天に拠ったのであり、更に、テセイデにおけるアーサイトの昇天は、ルーカヌス (Lucanus) のパルサリア (Pharsalia) におけるポンペイ (Pompey) の昇天に倣ったのであろう。ともあれ、チヨースーのこの個所は、トゥロイラスの最後に栄光を与えるものとして、この物語の最後を飾るにふさわしい締めくくりだと言わなければならない。

(41) John Gower (?1330-1408) のこと。チヨースーの友人で、「瞑想者の鏡」(Speculum Meditantis)、『叫ぶ者の声』(Vox Clamantis)、『恋人の懺悔』(Confessio Amantis) の作者。

(42) Ralph Strode (fl. 1350-1400) のこと。チヨースーの友人で、スコラ哲学者。

(43) 参照——ダンテ、天堂界、第十四歌、第二八—三〇行「限らるることなくしてすべてを限り、とこしえに三と二と一に生き、かつ、とこしえに治むる一と二と三は。」

(44) 父なる神、子なる神、聖霊の三位一体。